

# 「真の国際理解教育」を問う

前上海日本人学校浦東校 教諭

高知県立高知東高等学校 教諭 尾崎靖司

キーワード：中国、上海、国際理解教育、スピーチ大会

## 1. はじめに

上海は、東京からだど、片道4時間程度のフライトで到着する。生活面では、日本に近いという理由から、飲食店や習い事など「日本」ブランドを看板に掲げているところが多い。上海日本人学校に集う児童生徒たちにとっても、異国の地にながら、日本と遜色なく生活ができるということは、何よりも精神的な安定につながっている。しかしその反面、「国際理解教育（活動）」に関しては、成果が得られ



中日スピーチ出場者記念写真

にくい。海外に暮らしていることから、一見すると成果が得られやすいと考えられがちだが、そこには「盲点」が存在しており、最も成果が得られにくい分野なのである。その盲点を踏まえ、中学部では毎年、現地校生を招いて、「中学生中国語・日本語スピーチ大会」（以下、「中日スピーチ大会」とする）を開催している。本稿では、学校の概要、本校における「国際理解教育」の目標と手立て、在外教育施設における課題、そして本題となる中日スピーチ大会の実際、大会による交流の広がりや大会の意義、現地校での取り組みを踏まえ、結びとしての個人的知見を述べるものとする。

## 2. 上海日本人学校の概要

上海日本人学校は、1975年にその前身である「上海補習学校」としてスタートしている。1987年には、「上海日本人学校」（1996年に現在の虹橋地区に移転）として開校。日中間における事業の拡大に伴い、親の同伴者として、上海で暮らす子どもも増加。2005年には、世界一の海外日本人学校にまで成長する。（※1）さらなる増加を見据え、2006年に浦東地区にも新校舎を構え、上海日本人学校浦東校を開校させる。浦東校は、2019年現在で、13年目を迎える。（浦東校児童生徒数1,037名）（※2）

## 3. 本校における「国際理解教育」の目標と手立て

本校が目指す「国際理解教育」の目標は、

【中国や中国の人々の学習を通して世界へも目を向け、グローバルな視点で物事を考えることができるようにする。】  
【児童生徒が、「自分が自分であること」「異なるもの・異なることを認めること」「他者と関わること」の過程を通して自己の確立をめざす。】

としている。それらの目標を達成するための具体的な手立てとして位置づけられている取り組みが、「中日スピーチ大会」なのである。「中日スピーチ大会」とは、友好親善に関する内容、同世代に訴えたいこと・未来への展望に関する内容をテーマにし、日本人学校生徒は中国語でスピーチし、中国の現地生徒は日本語でスピーチをし合う大会のことである。すでに22回を数える歴史ある大会で、本校からも選ばれた生徒が発表者として参加する。現地の学校からも、このスピーチ大会を目標にして、生徒が積極的に参加している。記念すべき第1回大会は、1997年に開催されている。第1回大会のパンフレットの巻頭で、須藤英一校長（当時）は、「日中国交正常化25周年を記念して開催する」として、「互いの学校の代表者から文化の違いや文化の再発見、ひいては両国の展望につながる意見を聞くことのできる、またとない交流の場となる」との将来的な展望へのメッセージを巻頭に寄せている。

#### 4. 在外教育施設における課題

冒頭で示したように日本人学校で、「国際理解教育」を推し進めるにあたっては、次の課題を踏まえておかなければならない。

1つ目に、言語の課題。つまり、言語習得のことである。個人差はあるものの、大人、子ども関係なく習得には時間がかかる。上海日本人学校に通う生徒の例を挙げると、学校での、週1回の中国語の授業の他に、週に1、2回のペースで、中国語のプライベートレッスンを受ける。その場合、中国語のレベルは、HSK4級（日常会話初歩）程度になる。（※3）能力や意欲によって習熟度合いは変動するが、多くの生徒は概ね、そのレベルにとどまっている現状である。



中日スピーチに臨む本校の生徒

2つ目に、「防犯上の課題」。簡単にいえば、外国ということもあり、児童生徒は自由に外出できない状況である。それは、防犯上の観点から、絶対的なものである。このことは、どこの日本人学校でも同じことが言えるのではないだろうか。

3つ目の「接点の課題」とは、上記2点の課題があるがゆえの課題である。現地校生徒との接点が乏しいという課題のことである。児童生徒は、同年代の現地の学校に通う児童生徒（以下「現地校生」と遭遇する機会がない。先述の通り、外出には制約がある。放課後や週末は、多くの生徒が公寓（マンション）内で過ごすか、習い事に出向くかの、いずれかである。実際、中学部の約70%の生徒が通塾をしている。（※4）日本人学校生徒の大半の進学先は、日本の高等学校ということもあり、普段の生活はもちろんのこと、習い事まで日本式の塾や稽古ごとに集中している。そのような状況から、現地校の生徒との関わりは「無」に等しいのである。以上の要因から「国際理解教育」は、異国にいながら「盲点」なのである。

#### 5. 「中日スピーチ大会」の実際

審査項目は、作文、中国語課題文暗唱、面接の3つからなる。作文については、

##### 【本番までの取り組みスケジュール】

- 6月 募集
- 7月 選考会
- 8月 日本語・中国語原稿を作成
- 9月 原稿の完成（原稿の手直しを含む）
- 10月 スピーチに向けての原稿の読み込み
- 11月 中日スピーチ大会 本番

「日中友好」をテーマにした作文課題である。中国語課題文暗唱は、中国語教師が審査をする。



中日スピーチ大会の様子

先述したように「中日スピーチ大会」では、自分の母国語ではな

い言語でスピーチをする。そして、本校の行事としても、国際理解教育の中核をなす行事ということから、中学部全員、および小

学部部の6年生、現地校生（参観者も含む）、現地校の引率教員、保護者、そして在上海日本国総領事など来賓も見守る中での発表となることから、かなりの緊張感がある。発表当日までの準備を考えると、いまさらながら発表者諸君の努力には、敬意を払いたい。

#### 6. 「中日スピーチ大会」による交流の広がり

中学部主催の一大行事ということもあり、「中日スピーチ大会」に絡めて、道徳の授業で「国際理解」のカテゴリーで日中のより良い関係を考えたり、互いの国についての深め合いの授業を行ったりする。その中で中国の文化への新たな発見があったり、日本の文化を見つめ直す機会となったりしている。昨年からの取り組みで、広報委員が小学6年生に、「中日スピーチ大会」を宣伝する企画を実行し、また視聴覚委員が、現地校出場者に突撃インタビューを敢行した。今年は、午後の活動として、現地校生を招待しての日本人学校での体験授業が実施された。初の試みであったが、好評につき次年度も実施される予定である。生徒間だけでなく、教員間のつながりも大事である。日本人学校の教員が現地校、中国の教育に興味があると同時に、現地校の教師陣にとっても、日本人学校の授業は非常に興味深いようである。中日スピーチの参加常連校である「甘泉外国語中学」より



甘泉外国語中学の先生方の訪問

視察団が訪れた。日本人学校の生徒が意欲的に発表する姿に驚いたり、クラスの壁面にある生徒の作品や作文を見入ったりした。上海の一般的な学校の教室では、生徒作品を掲示したりすることは少ないようで、大変熱心に見学されていた。縁あって、中国でも早くに日本語教育を取り入れている「甘泉外国語中学」や外国語教育に定評のある「上海外国語大学附属外国語学校」を視察する機会を得た。そこに集う生徒も、授業を日本語で受け日本語でしっかり答えようとしていて真剣そのものだ。意欲的に取り組んでいる姿が実に印象的であった。

## 7. 「中日スピーチ大会」の意義

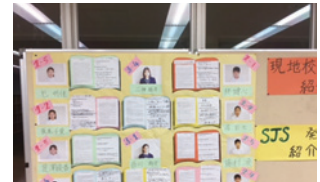
ここで、私見をはさむ。先にも述べた通り、防犯上の問題もあり、生徒は、原則、単独での外出は禁じられている。それはつまり、同じ学年の中国人生徒との交流は、皆無である。こちらが積極的な姿勢をみせない限り、接点もなければ、挨拶を交わすこともない。ましてや中国の同年代の生徒が、どのような考えをもち、日本に対してどのような思いを抱いているのか、日中の関係をどのように捉えているのかということは、深い部分での話し合いなどの機会がない以上、知るよしもないというのが現状である。中学生に必要なのは、多くの意見の交流である。中学生ともなれば、世界情勢にも目を向ける学齢である。世界情勢の中で、日中間がどのような状態にあるかということも学習している。さまざまな状況から、「なぜ」という疑問が生まれてくるのも当然のことであろう。異なった生活環境、異なる歴史観をもった同じ学年の両国の生徒が互いの違いを認め合う。価値観の違いは、むしろ友好に発展させるための導入となる。筆者自身、このスピーチ大会のスピーチは、興味深く印象に残っているものばかりである。給食の時間、飲み干した牛乳のパックを丁寧にたたんで捨てる日本人のマナーや「すみません」という言葉は、自分が他人に対して及ぼすであろう影響を感じている日本人の謙虚さの表れとする、日本人が忘れかけていることを気づかせてくれたものであった。一方、日本人学校の生徒も、日本人の父と中国人の母をもつ出自に触れて、自分の心のうちを語った生徒や現地校に通っている時に、常に自分を気遣って支えになってくれた中国の友達の優しさを語った生徒など、どのスピーチも考えさせられるものばかりであった。自国と他国の文化を踏まえながら、両国を考えたり、また自己をみつめた上で、よりよい自己を見出したりしていく。このスピーチ大会は、「国際理解教育」の目標をしっかり捉えているのである。



日本人学校の授業を参観する甘泉の先生方



小学6年生に広報活動



図書委員が作成した中日スピーチ出場者を紹介する掲示



日本人学校生と現地校生の教え学び合いが見られた

## 8. 現地校での取り組み

現地校がどのように、本大会を捉えて取り組んでいるのか、考察を深める意味で現地校での様子を紹介する。第1回から参加している「甘泉外国語中学」の担当者である任賀先生による寄稿を紹介する。(尚、一部修正を加えている)以下寄稿文。

「中日スピーチは、毎年申込制で、各学年10名～12名の生徒を選抜しています。数年前の生徒と比較してみると、知識が豊富で、視野の広い生徒が多くなったと思います。その反面、以前の学生と比べると、学習に対する意欲やモチベーショ



甘泉外国語中学日本語授業の様子





上海外国語大学附属外国語学校授業の様子

ンが低下している部分もあります。この大会で大きく成長している生徒は多いです。現在、大阪大学1年生の林さんは、2013年の第17回大会に参加しました。彼女が中学生の時に参加した、この大会から飛躍的に成長しました。また、昨年の大会に参加した蔣さんは、大会参加後、さらに意欲的になり、その年に開催された日本語N1（日本語能力試験）試験に合格しました。そして翌年、上海市日本語中級通訳資格を取得しました。これは中学2年生にとっては、非常に難しいものなのです。また、参加生徒の多くは、日本への留学を目標にして、励んでいます。引用終わり（傍線は筆者の手による）」本スピーチ大会出場が、現地校の生徒への学習意欲につながっていることが感じられる。

## 9. 結び

昨年2018年で、日中平和友好条約締結40周年を迎えた。本大会が開催されてからも、20数年以上の月日が流れている。日中両国の関係は決して平坦なものではなかった。歴史上の問題や現在の情勢など、一括りでは片付かない問題が、そこにはある。そのような中、このスピーチ大会は、「日中友好」をテーマに、20年以上途切れることなく続いてきたのである。両国の未来を担う若者が、このスピーチ大会で、共に「日中友好」を考えてきた軌跡を振り返ることができれば、両国が今よりももっと、より良い関係を保てると確信する。筆者が、上海日本人学校に在籍していた3年間だけでも、このスピーチ大会は、着実に進化を遂げ、より良いものになっている。現地校で指導されている担当の先生や生徒からも、本スピーチ大会を、日本語の「登竜門」と位置付けし、参加することを、励みにされていると聞く。第21回発表者である藤村凌くん（当時、上海日本人学校浦東校中学部2年）が、発表の中で語ったことが思い出される。彼は、上海で過ごした数年間を振り返り「僕にできることは、体験を通して視野と見聞を広げることだ。（中略）相手の国の文化、国民性を理解した上で、自分の意見をはっきりと主張し、発信できる力をつけることが大切である」と力強く語ってくれた。本当の「国際交流」というのは、友好を大前提として、互いの違いに気づき、話合い、そして違いを認め合っこそ、成り立つのである。この「中日スピーチ大会」は、発表者はもちろんのこと、聴衆も、参加者の1人である。そのスピーチを聞き、共により良い未来を模索し、考えるきっかけとしてほしい。彼らの未来において、このスピーチ大会が今後とも、よりよい礎になることを期待したい。



談笑する両校の生徒

## 【参考文献】

- ※ 1 外務省作成「海外在留邦人数調査統計」より引用
- ※ 2 創立三十周年記念誌「上海日本人学校」よりデータを参照
- ※ 3 HSKとは中国国家の中国語検定試験のことである
- ※ 4 平成28年度実施の「生活アンケート」よりデータを参照